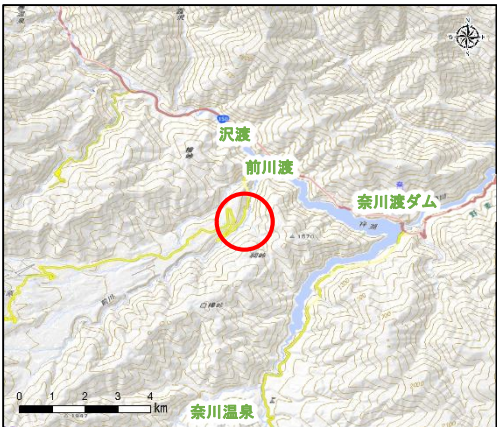


2.2 天明二年（1782）のシブナギ（位置 No.②）	
発生年月日	天明二年（1782）六月九日（7月18日）
発生地点	長野県松本市安曇大野川
緯度・経度	36.135535, 137.676681
発生誘因	降雨
天然ダムの形成	有 ・ 無
被害状況	人的被害：なし、家屋被害：人家 33 軒
災害概要	天明二年（1782）、大野川村（現在の松本市安曇大野川）の前川右岸のシブナギで発生した大規模崩壊が前川を堰き止め、人家 33 軒が流失しました。 また、天然ダムの上流では家屋の湛水被害も発生しました。 この時の崩壊では崩れた土砂が前川の谷を埋め、更にその崩壊土砂が対岸まで突き上げるように押し出したと伝えられています。



位置図

国土地理院「標準地図」に加筆

◎ シブナギの崩壊と突き上げの原

『入り四ヶ村書付第二十七集』には大野川村で山崩れが起きて天然ダムが形成され、それにより上流側の家屋が浸水による被害を受けたことが伝えられています。

また、この資料には「稲核村（シブナギから 14km 下流）の庄屋は、この天然ダムが決壊すると、25 年前に発生したトバタ崩れ（2.1 項参照）の時のように下流の集落に大被害を与えた洪水が再び発生することを恐れ、このシブナギの崩壊と天然ダムの発生を下流の集落に知らせた」と記載されています。トバタ崩れやシブナギの崩壊が下流の集落にとって、いかに恐ろしいものであったかを察する事ができます。

このシブナギの崩壊地の対岸には突き上げの原と呼ばれる小さな平坦地がありますが、かつてこの場所には、旧大野川小学校（写真 2.8）が建っていました。

図 2.11 に活断層である「境峠断層」の方向を入れましたが、この断層による破碎帯とシブナギの崩壊には関連があると思われます。

この突き上げの原のことについては、福島・長沢（1986）によると「旧小学校のあった所は、深い前川の谷に面した小広場です。ここは突き上げの原といい、昔対岸のシブナギの山が崩れて前川を埋め、さらに対岸のここまで土砂が押し出してきました。崩落の勢いで突き上げてできた所ですから『突き上げの原』という名前が付きしました。今この学校跡地に立ってみますと、その時の崩落のものすごさが思いやられると同時に、その押し出した土砂が今日のような谷に削られたのですから、大昔の話です。」となっています。

なお、シブナギの崩壊によってできた天然ダムの規模ですが、図 2.9 をもとに計測すると標高 1040m、湛水高 40m、湛水面積 7.6 万㎡、湛水

量 103 万 m^3 と推定され、多くの人家が図 2.10 のように水没したものと想像されます。

◎ 所々山抜ケ之事

『所々山抜ケ之事』（写真 2.7）は、稻核の庄屋に伝わっていた災害の記録ですが、毎年正月に書き換え、山崩れ等の災害への関心が薄れないように

していたと伝えられているものです。この中に大野川蛇拔とある記載は、発生年の記載が一年違っているものの、前述のシブナギの崩壊のことを指していると推定されます。

なお、大野川蛇拔という記載の右隣にある「中山砥畑山抜」という記載は、2.1 項で説明したトバタ崩れのことを指しています。

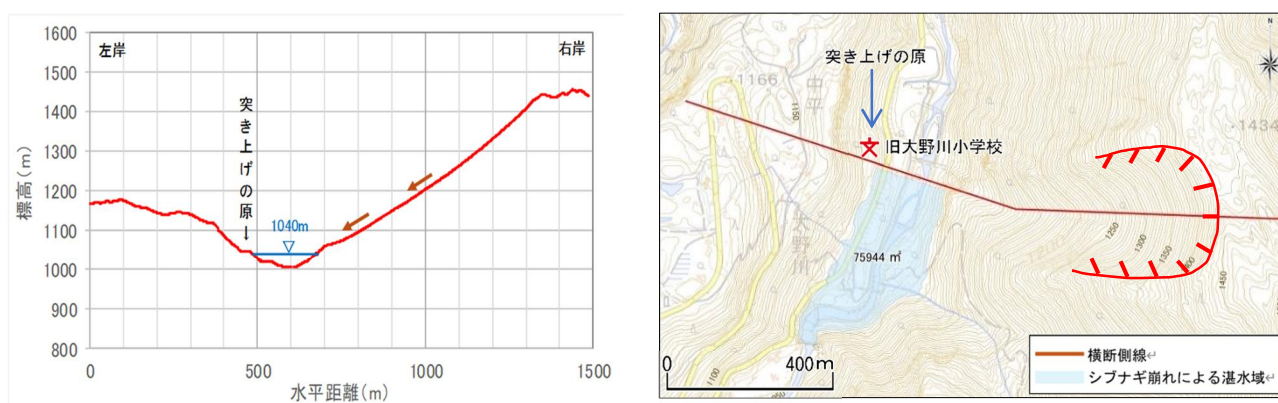


図 2.9 「シブナギ」崩壊地周辺の断面図と天然ダムの規模及び旧大野川小学校の位置図
(地理院地図「標準地図」に加筆)

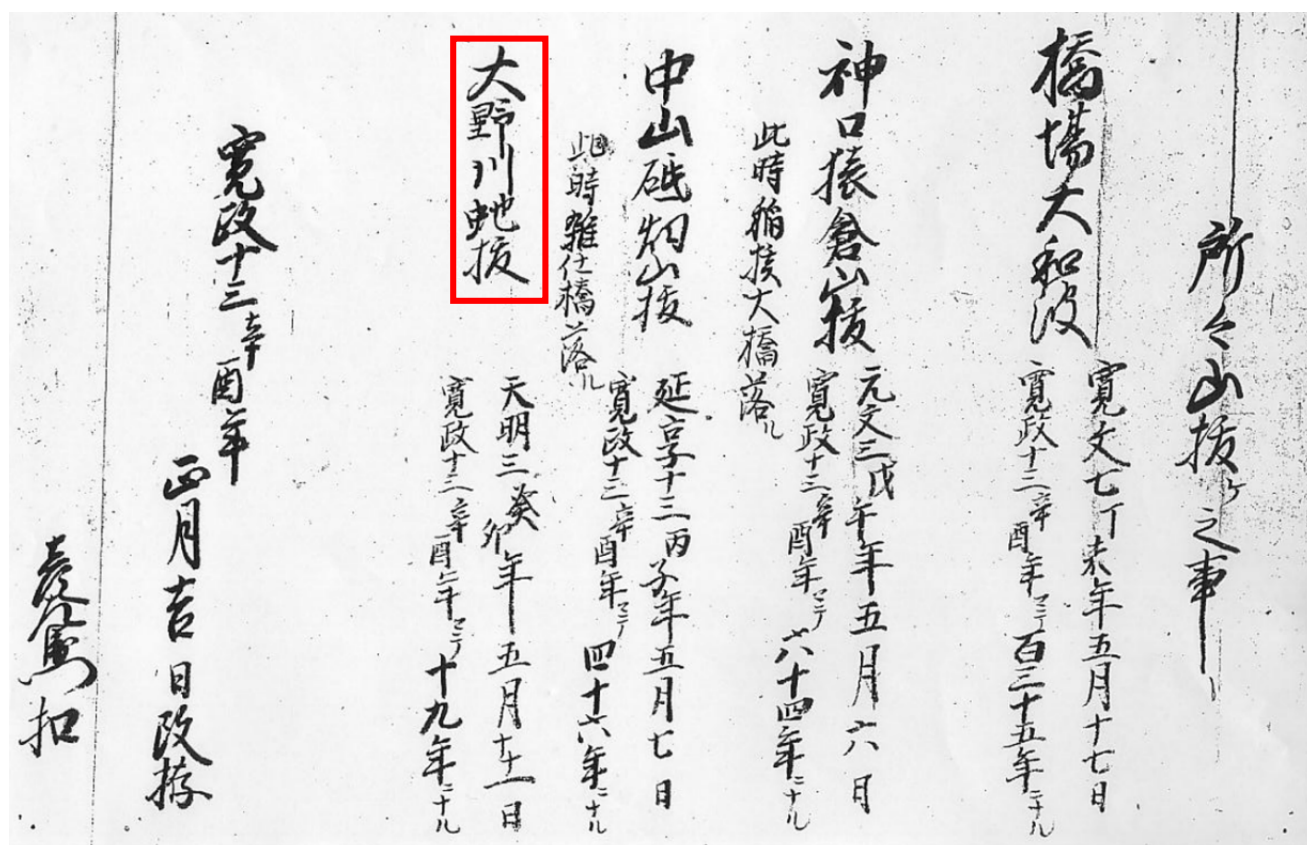


写真 2.7 『所々山抜ケ之事』（松本市立博物館蔵）

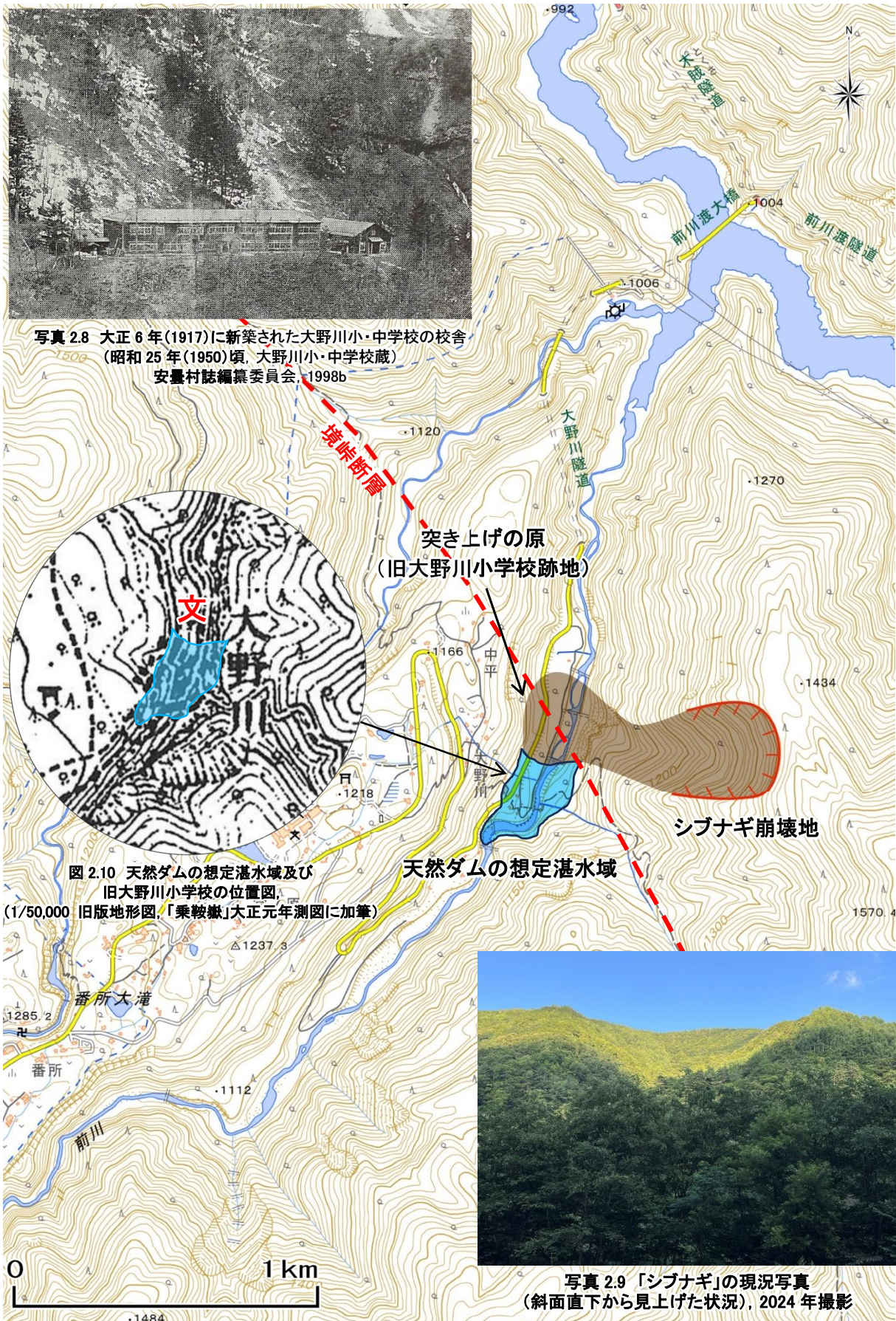




図 2.12 シブナギの災害状況図の赤色立体地図